

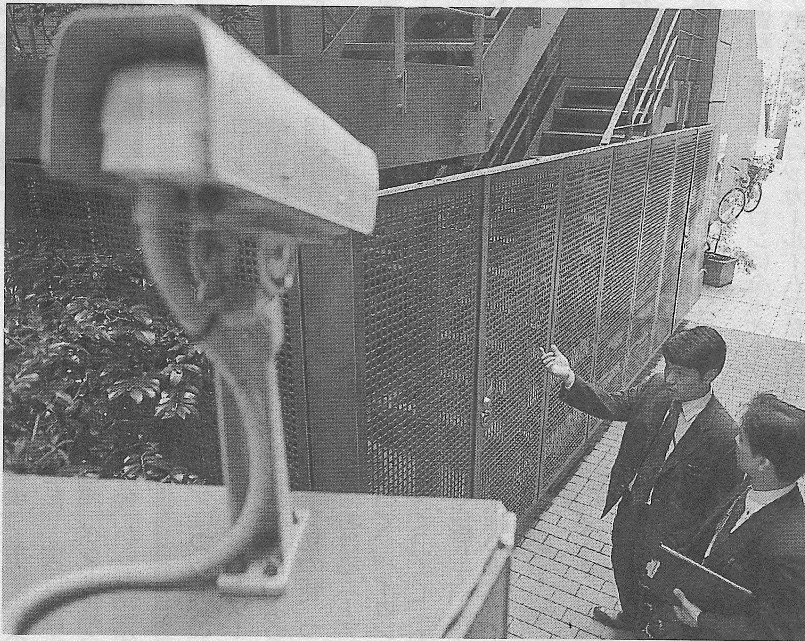
技術 × 捜査

東京都文京区内の裏通りを歩いていたスーツ姿の男性が、事務所ビルの自動ドアの奥をのぞき込んで声を上げた。「ここ映ってるんじゃないか?」。天井に設置された防犯カメラを見た連れの男性もつなぎ、2人は管理事務所に駆け込んだ。

全国に400万台超

2人は警視庁で防犯カメラの画像を収集・解析する捜査支援分析センター(SSBC)の捜査員。3日前に起きたコンビニエンスストア強盗の容疑者の画像を求めて歩き回り、6時間かけてコンビニなど4カ所で犯行時間帯の画像を入手した。「画像は1週間程度で書き換えられることが多く、時間との戦い」と捜査員の一人は話す。

三種の神器フル稼働



警視庁捜査支援分析センターの捜査員は「画像入手は時間との戦い」と話す。

防犯カメラ・DNA鑑定・携帯

店舗、ビル、住宅、駐則(警視庁幹部)。警視庁車場、街灯―。大手警備会社によると、国内の防犯カメラは400万台を超えているとみられる。「現場周辺で画像を集めるのは初動捜査の鉄則」(警視庁幹部)。警視庁車場、街灯―。大手警備会社によると、国内の防犯カメラは400万台を超えているとみられる。「現場周辺で画像を集めるのは初動捜査の鉄則」(警視庁幹部)。

軽傷を負った事件では、店のカメラに映った容疑者の女の姿をパトロールの警察官の携帯電話に一斉送信。約2時間後にR渋谷駅付近で身柄を確保した。女は包丁を所持し、「別の人を刺そうと試していた」と話したという。

警視庁が2月末まで都内のカメラ20台を使って試験運用したシステムは、指名手配中の容疑者の顔を人混みの中から自動的に検出し、通報する。大阪大産業科学研究所(大阪府茨木市)の八木康史教授らのグループは、歩幅や腕の振り方の特徴から個人を識別するソフトを開発し、警察庁科学警察研究所が実用性の評価を進めている。

「技術の発達によって捜査の現場は様変わりした。今や防犯カメラ、DNA鑑定、携帯電話は捜査を支える三種の神器」と警視庁幹部は話す。

汗や唾液、髪の毛などわずかな遺留物からDNA型を識別するDNA鑑定精度は、約25年前の導入当時の「千人に1・2人」のレベルから「4兆7千億人に1人」に向かっている。

2012年の解析数は約26万7千件に上り、10年間で約90倍に増えた。

携帯電話は、全地球位置システム(GPS)や基地局との通信による位置情報が容疑者の追跡などに使われているほか、通話履歴、メールなどのデータ解析は年2万件を超えている。

裏付け怠れず だが、新技術がもたらす「証拠」には落とし穴も潜んでいる。昨年、大阪府警は給油カードを盗んだとして堺市の男性を誤認逮捕した。ガソリンスタンドのカメラに映った男性の姿が決め手とされたが、カメラの表示時刻がずれているのを見落とし、裏付け捜査も怠っていた。

警視庁幹部は「科学技術の活用で得られた証拠に安易に依存してはならない」と強調。「取り調べや裏付け捜査など、捜査の基本を徹底すべき」とに変わりはないと戒めている。

◇ 進歩する科学技術がもたらしている捜査現場の変化を報告する。

数と精度で証拠探る

「技術の発達によって捜査の現場は様変わりした。今や防犯カメラ、DNA鑑定、携帯電話は捜査を支える三種の神器」と警視庁幹部は話す。

汗や唾液、髪の毛などわずかな遺留物からDNA型を識別するDNA鑑定精度は、約25年前の導入当時の「千人に1・2人」のレベルから「4兆7千億人に1人」に向かっている。

2012年の解析数は約26万7千件に上り、10年間で約90倍に増えた。

進歩する科学技術がもたらしている捜査現場の変化を報告する。